

いるのではなく、辛亥革命以後、國民革命にいたる約十五年間をひろく取り扱い、五四を中心とするその時期を、政治・社会・思想・文学等の諸側面より多角的に解明しようとするものである。當面、當時の時代的雰囲気把むために、『新青年』を通讀する計畫をたて、毎週、擔當者に平均二號宛紹介してもらい、随時、研究動向の報告などをさしはさんでいくつもりである。この間の特筆すべきこととして、ジェローム・チェン(陳志讓)氏に、「軍閥時代における南北問題」との講演をしていただいた。なお、四十八年度の非常勤講師は、花園大學助教小野信爾氏にお願いしている。

- 五月十一日 訪中報告 島田 虔次
- 五月十八日 〃〃 小野 和子
- 五月二十五日 青年雜誌創刊號 狹間 直樹
- 六月一日 〃〃 第一卷第二・三號 河田 悌一
- 六月八日 〃〃 第一卷第四・五號 松本 英紀
- 六月十五日 〃〃 第一卷第六號 小野 和子
- 六月二十二日 「軍閥時代における南北問題」 ジェローム・チェン
- 六月二十九日 新青年 第二卷第一號 森 時彦
- 七月六日 新青年第二卷第二・三號 副島 圓照
- 九月二十一日 〃〃 第二卷第四・五號 森 紀子
- 九月二十八日 〃〃 第二卷第六號 第三卷第一號 中島 長文

科學者列傳の研究

班長 山田 慶兒
科學者と技術者の傳記をとおして、中國の科學技術の特質をとらえようというのがねらいである。そのために、時代を追って、正史のなかの科學者技術者の列傳を會讀している。今年宋書・南齊書・梁書・陳書を了えて、現在、魏書を讀んでい。なお、同時に、博物志の譯注をも進めており、いづれ出版する豫定である。

漢籍委員會

委員長 市原 亨吉
毎週一回の委員會を續け、漢籍整理の實習と整理業務の處理とを行なっている。本年七月に開催された第二回漢籍擔當職員講習會(文部省・京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センター共催)に全面的協力した。

類目委員會

委員長 市原 亨吉
東洋學文獻類目の編纂は、一九六五年(昭和四〇年)からは、本所附屬の東洋學文獻センターが中心となり、所内より、協力を得て進められて来たが、一九七〇年四月より、新たに類目委員會が発足して編纂を擔當することとなり、所内よりの協力體制が一そう強化され、内容の充實が期待されるに至った。毎週一回、定期的に會合して、編纂のための共同作業を実施している。一九七一年度版を昭和四八年三月に出版した。ひきつづき一九七二年度版を準備中である。

日本部

一九三〇年前後の政治と社會

班長 井上 清
この研究班は前期の「大正・昭和初期の時代思潮と世論」をひきつづき、日本資本主義の危機が深

化する一九三〇年前後を對象として、この四月より發足した。當時の政治・社會・思想・文化狀況を總的に究明することを目的としている。現在は各員の問題意識にもとづいた報告を素材に討論をかさね、共同研究の準備をしている。

日本における市民文化の形成

班長 林屋辰三郎

『日本における市民文化の形成』第二期研究テーマとして、第一期の化政文化をうけ、幕末期の文化をとりあげることにした。日本文化史研究上の盲點ともいふべき時期であるだけに初歩的な事實の確認がまず必要であろう。一方第一期の報告書原稿も集まりつつあり、來春刊行の豫定である。

社會運動の研究

班長 渡部 徹

第一期の研究成果を、八月末『日本社會主義運動史論』(三一書房)として公刊したのにつづいて、第二期は兩大戦間の社會運動を中心に研究會をスタートさせている。運動の實態とそれを分析する方法をさらに深めてゆくことが、ひきつづいた課題として象定されている。

家族問題の研究

班長 太田 武男

この研究は、夫婦・親子・相續などをめぐる諸問題に關する理論的・實證的研究を、その主たる目的ないし内容とする。従来、この方面の研究は、それぞれの専門分野において個別的に行なわれていたが、今回の研究は、法律學的な觀點からの考察を中心としつつも、それに社會人類學的な觀點からの考察をも加えて、總的に行なわんとする点において特徴的である。昭和四一年四月より毎週一回研究會を開いて、主として夫婦問題、なかでもとくに「離婚問題」について研究をすす

め、その成果は『現代の離婚問題』（有斐閣）として世に送り、その後、昭和四四年四月からは、主として親子問題を中心に研究を進め、とりあえず、各専門分野からの親子観ないし親子関係の本質、養子制度などについての検討を行ない、目下、報告書『現代の親子問題』（有斐閣近刊）を中執筆である。また、昨年度文部省特定研究「産業構造の變革にともなう諸問題」が設定されたので、この研究班は、家族関係の變遷をテーマにその研究にも参加することになり、昨年夏休暇を利用して、堺市九間町において家族生活の實態を調査した。このたび刊行された「都市における家族の生活」（人文調査報告二九號）は、その調査報告である。

現代都市の研究 班長 三宅 一郎

この研究班は現代都市のかかえる諸問題を総合的に解明することを目標としているが、當面は日本の大都市、とくに京都と大阪を対象として、その政治、經濟、社會構造を實證的に分析するべく努力している。

西 洋 部

フランス第二帝政期の研究 班長 河野 健二

『ブルードン研究』（近く刊行）をまとめてゆく過程で、この特異な人物を生んだ時代の社會と文化に研究をおぼそやうという氣運が熟し、共同研究のテーマを設定した。若干のメンバーの交代をおこなって、現代にも通ずるところの多いこの時期の全貌を多面的・多元的に探るべく、徐々に歩調を速めつつある。

西洋近世論理想思想史の研究 班長 上山 春平

本年度發足したこの研究班は、現在本格的の研究のための準備として、昨年より始めた『ポール・ロワイアル論理想』の輪讀を繼續している。十七世紀—十九世紀の論理想の源流ともいふべきこの本を検討することにより、いくつかの具體的研究テーマを設定する豫定である。

知識人層と社會 班長 會田 雄次

前近代社會においても、當然のこととして層としての社會層が、重要な役割をしめていた。従来から多くとりあげられてきた、近代社會における知識人のありかた、あるいは前近代における代表的な個々の知識人の、知識の内容、といったものではなく、この社會層としての、前近代知識人の、歴史的な分析を目標として、この研究班は、四十八年度から結成された。

文明の比較社會人類學的研究 班長 梅棹 忠夫

従来、未開社會の研究に主力をむけられていた社會人類學的研究方法をもちいて、世界の諸文明の比較研究を行なおうという目的である。地理學、言語學、歴史學、生態學などの専門家もまじえて、廣い視野からの研究報告がなされている。

アフリカ社會の研究 班長 棹 忠夫

本班は京都大學關係のアフリカにおける人類學調査の経験者を中心として構成されている。現地調査の結果を理論化する作業が續けられている。

理論人類學の研究 班長 梅棹 忠夫

人類學研究における理論的側面および方法論的開拓をめざす研究班である。とくに精神人類學および人類學におけるモデル形成の試みなどがなされている。

現代における知識の意味 班長 樺山 紘一

過去三年間、つづけられた、つづこんだ討論の結果は、ほぼ各自の問題意識とむすびつけて、整理された。それぞれ特殊な領域の方法や對象を、現代における知識と學問一般に關連づける方途をもとめながら、最終的な報告書の執筆の段階に入っている。この原稿は、ふたたび共同討議で検討され、ちかく公刊の豫定である。

個 人 研 究

- 東 方 部**
- 中國古文書學 藤 枝 晃
 - 中國運河史の研究 日比野丈夫
 - 中國における文學と美術の交流 田中 謙二
 - 民國初期思想史 島田 虔次
 - 魏晉老莊思想研究 福永 光司
 - 六朝貴族社會の研究 川勝 義雄
 - 唐代名人傳記資料の収集と年譜の作成 市原 亨吉
 - 殷周文物の考古學的研究 林 巳奈夫
 - 宋代開封の研究 梅原 郁
 - 疑偽經典の研究 牧田 諦亮
 - 宋代の科學と技術 山田 慶兒
 - 中國の詩學 荒井 健
 - 現代中國文學の諸相 竹内 實
 - 中國古代官僚制の研究 永田 英正
 - 白居易の住居 今井 清
 - 明清思想史 小野 和子
 - インド佛教思想史—大攝乘論に至るまで— 荒牧 典俊
 - 明清における天文學・曆學・數學 橋本 敬造

南京臨時政府の研究
分類法の研究

狹間 直樹
中西 恵子

六月一三日 訪中報告(五) 小野 和子
六月二〇日 林論文「漢鏡の圖柄」二、三について」
批評 小南 一郎

日本部

日本帝國主義の研究
日本勞働運動史

井上 清
渡部 徹

六月二七日 川勝論文「孫吳政權の崩壊から江南
貴族制へ」批評 永田 英正

變革期における歴史と文化
家族法の研究

林屋辰三郎
太田 武男

六月二七日 橋本論文「梅文鼎の數學研究」批
評 愛宕 元

横井時敬の研究
日本技術史の研究

飯沼 二郎
吉田 光邦

七月四日 田中論文「朱門弟子師事年攷」批
評 市原 亨吉

日本近代文化の研究
日本フアンズムの研究

飛鳥井雅道
古屋 哲夫

九月一九日 荒井論文「滄浪詩話と潛溪詩眼」
批評 竹内 實

西洋部

世界資本主義の構造
ヨーロッパ一五・一六世紀の社會と思想

河野 健二
會田 雄次

人文科學夏期講座 於 日本イタリア京都會館
「海外調査の旅」
八月一日 トルコの村から 松原 正毅
イタリヤあちこち 會田 雄次
二日 ベンガルの熱い冬 横山 俊夫
中國のプロ文革前後 井上 清
三日 バクトリアとガンダーラ 桑山 正進
中國各地の文物 林 巳奈夫

社會科學方法論
文化分析の基礎的研究

上山 春平
梅棹 忠夫

ルソーの政治思想について
宗教改革期ドイツの思想と社會
逆ユートピア小説の比較研究
中村賢二郎
多田道太郎

西洋論理想史
シュメール都市の比較類型論的研究

山下 正男
前川 和也

歸納論理想と確率基礎論
内井 惣七

東方部研究會

五月九日 訪中報告(一)
五月一六日 訪中報告(二)
五月二三日 中國との學術交流に關する討論
五月三〇日 訪中報告(三)
六月七日 訪中報告(四)

島田 虔次
島田 虔次
福永 光司
林 巳奈夫

事業概況

所員動靜

○平岡武夫・小野川秀美兩教授(東方部) 停年退官。

○川勝義雄(東方部)・市原亨吉(附屬東洋學文獻センター)兩助教は教授に昇任(以上四月一日付)

○梅棹忠夫教授(西洋部)は國文學研究資料館室長に配置換、同併任教授(四月二日付)

○竹内 實氏を助教(東方部)に採用。(五月一日付)

○船越昭生助手(東方部)は奈良女子大學助教(文學部)として轉出(六月一日付)

○永田英正講師(東方部)は、助教(附屬東洋學文獻センター)に昇任

○曾布川 寛氏を助手(東方部)に採用(以上七月一日付)

○太田武夫助教(日本部)は教授に昇任(七月一日付)

○井上忠司助手(日本部)は辭任の上、甲南大學助教として轉出。(九月三日付)

○牧田諱亮助教は、五月一〇日伊丹發、丹光大學、東國大學で第一回日韓佛教學術會議に出席

カイロ大學、ナポリ大學東方研究院、大英博物館等で佛教學に關する研究を行い、パリ大學で第九回世界東洋學者會議に参加、七月二九日歸國。

○川勝義雄教授は、七月一三日羽田發、パリ大學で第二一回國際東洋學者會議に参加、ベルギー高等中國學研究所、チューリッヒ大學等で古代中國研究に關する調査を終え、八月二二日歸國。

○多田道太郎助教は、八月一日羽田發、パリ大學、カンペール近郊等でブルターニュ地方文化遺跡調査及び資料蒐集を終え、九月一六日歸國。

○本學研修員規程により、本研究所において研修する外國人研修員とその題目は次のとおりであ

る。

19。

Willem Remmelink (ライデン大學大學院生)

明清思想史 指導教官 島田 教授

期間 四八年四月～四九年三月

David Agnes (關西日佛學館教授)

日本近代文學—夏目漱石を中心に— 指導教官 飛鳥井助教授

期間 四八年四月～四九年三月

高美青 (中文大學新亞書院藝術系講師)

近代中日美術(南畫) 指導教官 日比野教授

期間 四八年七月～同年九月

Mira Mihelich (ユール大學教授)

宋代史—園田と宋代農業の發達—

指導教官 梅原助教授

期間 四八年八月～四九年七月

出版物

紀要

東方學報 第四五册(紀要第六五册)

九月二十日刊

研究報告その他

日本社會主義運動史論 渡部徹・飛鳥井雄道共編

八月三十一日(三一書房刊)